3 月 12 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　9：　18－27

「わたしについて来たい者は」

「人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日目に復活することになっている。」(ルカによる福音書 9:22)

イエスが自らの受難について弟子たちに語られた時、どんな表情だったか想像してみてはいかがでしょう。悲壮感漂う真剣な顔、深い悩みと共にある顔、あるいはにっこりした笑顔……etc.。いずれの顔もイエスらしいと言えるでしょう。

ここでは敢えて、笑顔だったと考えてみたいと思います。しかし、それは諦めの笑顔ではありません。未来を見据えた、真剣さと明るさを伴う笑顔です。目の前にいる弟子たちだけでなく、救いを待ち望む全ての者たちを安心させる笑顔です。

もちろん、語られる内容は厳しさと辛さを伴うものではあるけれど、イエスは全てを担う覚悟を決められています(「彼らの苦難を常に御自分の苦難とし／御前に仕える御使いによって彼らを救い／愛と憐れみをもって彼らを贖い／昔から常に／彼らを負い、彼らを担ってくださった。」イザヤ書 63:9)。ヒロイックにではなく、神から託された働きをしっかりと担っておられます。

そこには、「自分さえ良ければ」が入り込む隙はありません。「あなたのために」という押しつけがましさもありません。イエスは神の力を信じて前を向かれているのみです。

ならば、私たち人間にできることはただ一つです。神に感謝し、救いのその時を待ち望むのみです(「主に感謝せよ。主は慈しみ深く／人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。」詩編 107:8)。

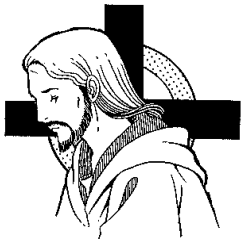
頭ではわかっています。いや、わかっているつもりです。けれども、現実の厳しさに打ちのめされそうになった時、私たちは簡単に諦めてしまうのもまた事実です。すぐに「自分さえ良ければ」という安きに逃れようとします。だから、イエスは復活の喜びがあることをさらりと宣言された後、こう続けられるのです。

「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」(ルカによる福音書 9:23)

「あなたたちは誰に聞き、誰に従うのか」と問われています。そして、ご自身の姿を指し示してくださいます。

「自分さえ良ければ」の行き着く先は、悪魔に魂を売り渡すことしかありません(「そして悪魔は言った。『この国々の一切の権力と繁栄とを与えよう。それはわたしに任されていて、これと思う人に与えることができるからだ。だから、もしわたしを拝むなら、みんなあなたのものになる。』」ルカによる福音書 4:6-7)。であるならば、「自分さえ良ければ」という自己中心的な自分を棄てることが大切になるでしょう。

パウロはそれを「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、／キリストと共に生きるようになる」(テモテへの手紙二 2:11)と言いました。自己中心的な弱い自分をイエスに託すことで、生き直すことができる、と。



そして、それぞれが十字架を背負っていくことが求められています。「十字架」と聞くと重さが強調されるように思えるかもしれません。しかし、イエスの十字架は痛みだけでなく、愛で溢れているのです。だから、十字架を背負う歩みは、力で他を圧倒する歩みではなく、神が創られた全ての命を愛する歩みとなるでしょう。全ての者を笑顔に、諦めの笑顔ではなく明るい未来を見据える笑顔にする歩みであるはずです。

改めて、神が私たちに託されている役割を存分に果たしていきたいと願います。